

【使徒書日課】ヨハネの黙示録 19章11～16節

¹¹そして、わたしは天が開かれているのを見た。すると、見よ、白い馬が現れた。それに乗っている方は、「誠実」および「真実」と呼ばれて、正義をもって裁き、また戦われる。¹²その目は燃え盛る炎のようで、頭には多くの王冠があった。この方には、自分のほかはだれも知らない名が記されていた。¹³また、血に染まった衣を身にまどっており、その名は「神の言葉」と呼ばれた。¹⁴そして、天の軍勢が白い馬に乗り、白く清い麻の布をまどってこの方に従っていた。¹⁵この方の口からは、鋭い剣が出ている。諸国の民をそれで打ち倒すのである。また、自ら鉄の杖で彼らを治める。この方はぶどう酒の搾り桶を踏むが、これには全能者である神の激しい怒りが込められている。¹⁶この方の衣と腿のあたりには、「王の王、主の主」という名が記されていた。

【福音書日課】マタイによる福音書 25章31～46節

³¹「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。³²そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、³³羊を右に、山羊を左に置く。³⁴そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。³⁵お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、³⁶裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』³⁷すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたのでしょうか。³⁸いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたのでしょうか。³⁹いつ、病気をなましたり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたのでしょうか。』⁴⁰そこで、王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

⁴¹それから、王は左側にいる人たちにも言う。『呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。⁴²お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渇いたときに飲ませず、⁴³旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気のとき、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ。』⁴⁴すると、彼らも答える。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えたり、渇いたり、旅をしたり、裸であったり、病気であったり、牢におられたりするのを見て、お世話をしなかったのでしょうか。』⁴⁵そこで、王は答える。『はっきり言うておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである。』⁴⁶こうして、この者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかるのである。』

ひとつに集められるとき

今日はじめておいでくださった方がいらっしゃるならば、わたしは、その方にまず申し上げたいことがあります。「ようこそ、おいでくださいました。今日、ここにおいでくださったあなたは、ここですばらしい奇跡を見ているのです。あなたと、わたしと、そして他の人たちが、今、ひとつところに集められていること。ここでひとつに集められて、互いに会わされていること。それは、間違いなく、奇跡です。すばらしい奇跡です。その奇跡のただ中に、皆さんは、今いらっしゃる。その奇跡を、ご覧になられている。」

「教会に来てみたら、牧師がいきなりおかしなことを言い出した」と思われた方も、あるかもしれません。けれども、わたしは、何度でもみなさんに申し上げるでしょう。今、ここで起こっていることは、奇跡です。わたしたちが、今、このようにひとつところに集められていることは、奇跡です。何となれば、わたしたちは、今、神を礼拝する営みの中にいるからです。神の前に立つという営みの中に、わたしたちは皆、導かれて来た。その営みの中に、ひとつ集められてきた。そして、ひとつに集められて、神の前で互いに会うようにとされている。神がそうしてくださったからです。神がそのように導いてくださり、集めてくださり、ここに共にいるようにとしてくださった。だから、奇跡なのです。

今日は、日曜日です。わたしは、牧師ですから当然のように、自分の仕えるこの石神井教会にまいりました。他のことは何も考えませんでしたけれども、きちんと教会にまいるための準備をしてきました。教会の皆さんも、当然のように、ご自分の属するこの石神井教会においでくださった。他のご用事のある方もあったかもしれませんが、ご自分で判断して、今日はここに来ることを決断して、おいでになられた。そして、他の皆さんも、この石神井教会に来ることは当然ではなかったかもしれないけれども、ご自分の意志で、今日は、ここにおいでくださったでしょう。無理に連れてこられたという方がいらっしゃらないとは限りませんが、そう言われる方も、たとえ嫌々だとしても、首に縄をかけられてここにいらっしゃるわけではないでしょう。渋々でも、最後はご自分で決められた。

けれども、そういう皆さんの集まりであるとしても、教会は、それを、神がなしてくださったことと言うのです。そう信じるのです。なぜならば、教会は、神がわたしたちすべての者をひとつにしようとしてくださっている、と信じているからです。神は、いつか必ず、すべての者をひとつにしてくださる。その目標を目指して、神は、まず教会から、神を信じ、神の御前に進み出てくる者の集まる場所から、そのご計画を始めてくださっている。そう信じて、ひとつ集められたところで、神のお働きの始まっていること、奇跡を見出しているのです。

「最も小さな者の一人」

教会の皆さんには、この何週間か毎日曜日にお話しをしてきましたが、今日は、教会暦(カレンダー)で一年一巡りの終わりの週の日曜日です。「週報」には、「終末主日」と記しています。「終末」や「世の終わり」を憶える日です。もちろん、

そうは言っても、何か、世界が破滅するときにやってくる、というようなことを考えるわけではありません。

ただ、そのように申し上げても、皆さんの中には、聖書の中に描かれた、「最後の審判」のようなイメージばかりを、「終末」や「世の終わり」という言葉から想像される方もあるかもしれません。今日の福音書は、まさに、そのような「最後の審判」のイメージを強くする箇所であるとも言えます。

世の終わりの最後のとき、まるで「閻魔大王」のようなイメージの神がすべての者をご自分の前に並ばせて、順番に右と左に選り分けるのです。そして、右に選り分けられた者に対して告げられます。「お前たちは、祝福された者だ。お前たちのために用意しておいたものを受け取るがよい」と。左に選り分けられた者に対しても、告げられます。「お前たちは、呪われた者だ。お前たちは、追放だ。悪魔と一緒に永遠の火の中で焼かれてしまえ」と。この、右に選り分けられた者と、左に選り分けられた者の、違いは何か。それは、「神の兄弟である最も小さい者の一人に対して、憐れみをもって接してくれたかどうか」だということです。しかも、それは、当人さえ気づかずにしていたこと、しなかったことが問われて、最終的にその人が救われるのかどうかの運命が決まってしまう。

随分、厳しい審判です。もちろん、ここに挙げられているような、飢えている人、渴いている人、旅の宿を求めている人、裸の人、病気の人、牢に囚われている人に対して、憐れみをもって、食べさせたり、飲ませたり、宿や服を提供したり、見舞ったり訪ねたりすることは、大切なことでしょう。特に、だれからも目を向けてもらえずにいる小さく弱い存在に対して目を向けることは、信仰のあるなしにかかわらず大切なこととして、わたしたちは教えられています。できれば、そのようにするべきだと思うし、それができなかつたときには、わたしたちは、心の中に良心の呵責のようなものを感じないわけにはいかないものです。

けれども、それができたかどうかで、その人の最終的な運命、その人の価値が決まってしまうとしたら、ずいぶん厳しいことです。キリスト教は、そういう厳しい倫理観を教えている、と言うこともできるかもしれません。では、キリスト者と呼ばれる者は、皆、最後の審判で右に選り分けてもらえるようにと、こういう倫理観を強く持って生き、行動することに、日々勤しんでいるのでしょうか。そうできているのでしょうか。

先立ち進まれる方に目を向けてこそ…

そういう倫理観を強く持って生きることを望んで、キリスト者になられた方も、きつといらっしゃると思います。そのように日々努力なさっている方も、少なくないでしょう。事実、そのような生き方を実践され、残して行かれた先達は、いくらでも挙げることができます。

けれども、そういう実践を「偽善だ」と見る方もあるでしょう。確かに、それが、最後の審判の採点対象になっているのだとしたら、それは単なる要領のよい「点取り虫」に有利な話になってしまいます。実際、わたしたちは、周りからキ

リスト者としてみられるときには、どこか、格好をつけようとする。教会に初めておいでの方があるかもしれないからと、わたしたち教会の者は、どこか緊張して、「キリスト者らしく振る舞わなければ」などと考えているところがある。中身はともかく、せめて外面で、「あんな人がクリスチャンか」とつまずかせることがないようにしたい、と思ったりしている。

本当のことを言いましょう。わたしたちキリスト者は、本当のところ、最後の審判で羊と山羊のように右と左に選り分けられるとしたら、自信をもって「自分は右に行ける」などと思ってはいないのです。そんな保証は、どこにもない。それが、わたしたちキリスト者の、自覚です。

では、わたしたちは皆、左に行かされるのか。神の怒りを買って、最後の審判の時に至って、神のもとから追放されてしまうのか。

そうではありません。わたしたちは、きっと、右側に招かれるのです。右側にふさわしくないのだけれども、右側に招き入れていただけるのです。いや、すでに、右側に招かれているのです。ふさわしくないままで、すでに、右側に招き入れていただけているのです。

この羊と山羊の選り分けられるたとえをお語りになられたのは、主イエス・キリストです。主イエスは、このたとえを、どのような思いでお語りになられたのでしょうか。弟子たちを脅して、仮に偽善であったとしてもよいから倫理的に振る舞うべきであると教えたのでしょうか。そうではないでしょう。

このたとえを聞いた弟子たちは、きっと、この右側に選ばれた人のしてきたこと、飢えている人に食べさせ、渴いている人に飲ませ、旅する人に宿を、裸の人に服を提供し、病気の人を見舞い、牢獄にいる人を訪ねるということを実践した人として、すぐに主イエスのことを思い浮かべたと思います。それ以外に、あり得ない。いや、弟子たちこそが、主イエスに食べさせてもらい、飲ませてもらい、宿や服を与えてもらい、病気の時に見舞ってもらい、牢を訪ねてもらった、と思いが当たったのではないのでしょうか。

「主の兄弟である最も小さい者の一人」とは、実は、他でもない、弟子たちのこと、わたしたちのことです。このわたしに主なる神がしてくださったこと。そこに目を遣るならば、わたしたちは、小さいながらも、同じようにしないわけにはいかない思いを抱くのです。主イエスが、わたしたちの行くべき道を先立ち進んでくださっているのです。

「あなたのために」と手を差し伸べてくださるお方。そのような神、そのような主イエス・キリストが、出会ってくださいます。そして、「わたしの後について来なさい」とお招きくださいます。そして、ご自分のもとに集められた者を、「教会」としてくださっているのです。

だから、わたしは、ここで、「主の兄弟である最も小さな者」である皆さん一人ひとりと出会わせていただいている。互いに「主の兄弟である最も小さな者」として出会わせていただいている。ここで、主と出会い、主の兄弟と出会い、「あなたのために」と一歩前に進み出る歩みを、共に始めさせていただくのです。